

二十二年度 町平和教育体験研修に参加して

## 自分の目で見て、耳で聞いて、体で感じる



東山田 矢崎 勇紀

### 研修を前にして

#### 二度と戦争を 起こさないために

僕が広島平和研修に参加した  
と思った理由は、曾祖父が戦  
争で没しているからです。その  
ため、小さい頃から、戦争の話  
を聞いて育って来ました。

僕の曾祖父は、陸軍の曹長だ  
ったという。昭和二〇年八月十  
八日、それが曾祖父の命日。八  
月十五日の終戦宣言も届かず、  
ボルネオという地で最後の日を  
迎えた。終戦後、生きて戻れた  
隊長が報告に来てくれたという。  
曾祖父は大きなヤシの木の下に  
大切に埋葬してもらったそうだ。  
だから遺骨はない。一枚の紙が  
木の箱に入れられて送られてき

たという。祖父が七歳の時だそ  
うだ。

日本では、八月六日に広島に  
原爆が落とされた。八月九日に  
は長崎にも落とされ、日本は大  
敗し、八月十五日終戦を宣言し  
た。あと三日。あと三日早く終  
戦の知らせが届いていたら、曾  
祖父は生きて戻れたはず。悔し  
くて悲しくなる。大切な人を失  
った家族の苦労を考えたことが  
あるのだろうか。僕はそんな戦  
争が許せない。

広島に落とされた原爆の威力  
はどのくらいのものであったの  
だろう。原爆によって、被爆した  
人と街の被害はどのくらいだっ  
たのだろう。

僕は戦争の傷跡を自分の目で  
見て、耳で聞いて、体で感じて  
きたいと思う。二度と戦争を起  
こさないために。家族を失い、  
大変な生活を送ってきた人のた  
めに。(下諏訪中学校三年)

### 広島から帰って

#### 想像を超えた恐ろしい現実

昭和二十年八月六日、史上初  
めての原子爆弾によって、街は  
破壊され、二十万人を越える多  
くの人の命が奪われた。

当時のまま保管してある原爆  
ドームは、一瞬にして鉄筋コン  
クリートも壊す原爆の威力を物  
語るものだった。資料館の中  
には、目を覆いたくなる様なた  
くさんの遺品が展示されていた。  
一瞬にして溶けてしまった屋根  
瓦。中身が焦げた弁当箱。ポロ  
ポロになった衣服、黒い雨。焼  
けただれた皮膚の写真、ケロイ  
ド…。見ているだけで、胸が苦  
しくなった。遺品の一つ一つか  
ら、大勢の人の声が聞こえる気  
がした。

そして自らの辛い体験を話し  
てくださった被爆者の方の生々  
しい話。それは僕の想像をはる  
かに超えた恐ろしい現実だった。  
僕はこの研修に参加して、自  
分の目で見て、自分の耳で聞き  
体で感じたこの事実を、一人で

も多くの人に伝えていきたいと  
思う。  
戦争を知らない僕たちの世代  
に、そしてその次の世代へと、  
学んだことを伝えていかなけれ  
ばならないと思います。  
(現在 諏訪二葉高校一年)



「原爆の子の像」の前で

### 下諏訪町平和体験研修

毎年7月末、町内の中学生代  
表8名と教職員2名を、平和教  
育体験研修として、広島へ派遣  
しています。

実際に自分の五感を通して、  
戦争の傷跡を見、被爆された方  
の話聞くことは、貴重な体験  
となっています。

下諏訪町図書館の8月の休館日は、1・8・15・22・26・29日です。

## 語り継ごう 戦争の記憶



下諏訪中学校三年

宮坂

萌々



私は、戦争体験者から実際の  
話を聞くことのできる最後の世  
代として、私たちにできること  
を考えてみました。

みなさんは、ひめゆり学徒隊  
を知っていますか。ひめゆり学  
徒隊とは、十二歳から十八歳ま  
での女子学生でつくりられ、沖繩  
戦で負傷した兵士の手当てをし  
ていた人たちです。彼女たちは  
狭い壕の中で必死で働き、その  
ほとんどがアメリカ兵の投げ入  
れた爆弾によって亡くなりました。

壕は蒸し暑くて虫が多く、気  
持ちのよい場所ではありません  
が、爆弾をよけることができる  
大切な場所でした。その中で働  
いていた宮良さんの壕も、とう  
とうアメリカ兵に見つかってし  
まいました。「男性は裸になっ

て、女性はそのまま出てこ  
い。「アメリカ兵の言葉に、誰  
一人出ていく人はいませんでし  
た。「この壕を破壊するぞ、い  
いか。」バババーンと爆弾が投  
げ込まれました。「お母さん助  
けて！」一寸先も見えない中、  
宮良さんはごつごつした岩にし  
がみつぎ、意識を失ってしま  
いました。意識を取り戻したのは  
三日後のことでした。



学徒たちが勤務した病院壕の入り口

その壕にいた人たちはほとん  
ど亡くなっていました。一週間  
ほどたつと、死体から蛆がわい

てきました。「自分は生きてい  
る、友達は死んで蛆がわいてい  
る。それを見なければならな  
かった私の気持ちが変わります  
か。」とてもつらそうに、宮良  
さんは話していました。その後  
宮良さんは必死に走り、壕を出  
ました。アメリカ兵がすぐ近く  
まで来ていました。宮良さんは  
一緒に逃げて来た看護師に「手  
榴弾、持っている？」と尋ね、  
看護師の持っていた手榴弾で死  
のうとしました。二人は向かい  
合い、信管を歯でぐつと抜き、  
勢いよく地面にたたきつけまし  
た。これが不発、爆発しませ  
んでした。宮良さんは「みんなは  
死に、私はつかまった。こんな  
恥はない。」とその時思ったそ  
うですが、「当時、私たちは死  
ぬことが名誉だと思った。でも  
それは違う。生きることが一番  
大事。」と今では思うそうです。  
私は、私たちと似たような歳  
の子たちが、働き死んでいくこ  
とに大きな衝撃を受けました。  
言葉で返すには重すぎる宮良さ  
んの「私の気持ちが分かります

か。」という問いかけ。みなさ  
んならどう答えますか。私には  
答えることができません。  
戦争がなければ、なくなるこ  
とのなかったたたくさんの命があ  
ります。たたくさんの涙がありま  
す。今の日本の半世紀の平和は、  
亡くなった方や戦争を体験した  
方たちによって支えられていま  
す。私たちがこれからの平和を  
守るためにしていいけることは、  
この戦争について考え、語り継  
ぐことではないでしょうか。  
私がひめゆり学徒隊を知った  
のは、何となく見ていたテレビ  
からでした。どんなきつかけで  
あれ、私と同じ世代の人に知っ  
てほしいと思います。そして次  
の世代に語り継ぎ、私たち自身  
の手で平和を守っていくこと。  
それが、戦争を経験していない  
世代が、戦争の犠牲になった  
方々や次の世代の人たちにでき  
ることなのだと思うのです。  
(二十二年度 なぎがま祭にて)

注 写真は「ひめゆり部隊の最後」  
(偕成社)より